

并取物子現抄

上





竹取物語抄

序



友人小山伯鳳竹取語法成爲其人  
与学所以際見也哉我社目爲多士  
不亦宜乎伯鳳實奇士也伯鳳耽書無  
極該博特善讀山海夷堅等書癖也  
嘗謂丈夫處世志于事功其德不志于





子功而以文事自衛者陋之又陋曰之  
道惟學在躬以豈暇已其佗美哉其  
志故親戚之親朋友之交善愛之以難  
處其所得之于學於是乎伯鳳之在可  
不念益壽乎何在僻編壽表邪余在伯  
所溝瀆不出瀆洛之書視之伯鳳之學

竹取序一

不啻冰炭而其交膠漆以其趨一之故已  
學也交也君子必有所操豈皮相之所  
得為郁士龍之笑元章之潔謂我其  
人而可乎伯鳳之取法是其病間之北士  
奇自冠已伯鳳豈盡于斯顧其粗淺伯  
鳳其得未之乃益壽之又姑淺余與伯鳳







無事のふりをして、  
 物々しい姿をばし、  
 代りては、  
 一見の如く、  
 既しほろひしを、  
 主として、  
 やすく、  
 石乃指のし地事、

うかき、  
 国なり、  
 を、  
 とも、  
 の、  
 り、  
 こ、  
 事、  
 玉の、  
 事、  
 事、  
 事、













古事記曰天字受賣命者猿  
女君等祖也  
日本紀曰勅天鈿女命汝反  
以所顯神名為姓氏曰賜猿  
女君之孫故猿女君等男女  
皆呼為君此其緣也  
今猿君宮造と云やつゝ是  
よりゆゑ但一やうに猿女  
天の御を断て断るゝはわ  
らとて事れ似つゝと  
あつゝは事とゆゑなり

竹取抄

いすまむしきけりわれ等とつゝたの  
うらまひのまじりて竹をわかつゝ  
はのうらまひのまじりて竹をわかつゝ  
こけなんいひくは

竹ハ本草れ中ニ益杖同くものなれ  
とて竹筴なりは竹と云ふ一史記  
淇園千畝竹其人與千戶侯等  
竹園せんほまらんハ諸侯れ之由也  
らとてやつゝなすべしハ竹のなれ  
猿君宮造とあり  
本書名 造續本紀日  
可追考  
これ竹の中にも竹ひつれ竹なん一とて  
うらまひのまじりて竹をわかつゝ



ふんふんそのふん 俗にあり  
 うしとれりふんふん 崇神  
 純法等二子慈愛共齊い  
 義の通かゆふんふん人とき  
 ふんふんふんふんふんふん  
 人ときふんふんふんふん  
 かつたふんふんふんふん  
 即かゆふんふんふんふん  
 らす。万十二かゆふんふん  
 ひふんふんふんふんふん  
 まあふんふんふんふんふん  
 くとふんふんふんふんふん  
 とふんふんふんふんふん  
 ふんふんふんふんふんふん  
 ふんふんふんふんふんふん  
 ふんふんふんふんふんふん  
 同ふんふんふんふんふん

いかりきわ。そのれは。三十許なる人。  
 いやふんふんふんふんふん

志在録曰。嘗聞外  
 舅。說頃。歲狂。牆間。熒。光尺餘。時。出  
 兄弟中。有不寧者。謂之。恠。憂之。數。  
 炳然。如初。外舅。性不甘。乃就。拔之。得  
 一物。回燈。下看。乃枯竹。根耳。其光。遂  
 滅。病者。無咎。似。ふんふん。事。なる。ふんふん。  
 異苑。員當。竹中。有人。三寸許。云。  
 貧。簞。竹節。中有。物。長數寸。絕。似。人形。  
 俗。謂之。竹人。契。冲河社。後。漢書。  
 西南夷傳。曰。夜郎者。初。有。女子。浣。於

竹上(乙)

けいれおひふんふん  
 おひふんふんふんふん  
 ふんふんふんふんふん

暹。方。有。三節。大竹。流入。足。間。聞。其中  
 有。辨。聲。剖。竹。視。之。得。一。男。兒。歸。養。之。  
 及。長。有。才。武。自。立。為。夜。郎。侯。以。竹。為  
 姓。按。華。陽。國。志。云。物。幽。怪。錄。  
 云。燕。延。長。史。有。大。竹。凌。雲。可。三。尺。圍。  
 代之。見。內。有。一。仙。翁。相。對。曰。平。生。深  
 根。歎。節。惜。為。主。人。所。伐。言。畢。乘。雲。而  
 去。去。賣。志。筒。順。和。名。津。端。嚴。  
 珍。奇。紀。日本。端。正。端。嚴。  
 愛。お。さ。れ。え。や。う。と。ま。朝。と。夕。と。た。よ。み。る。  
 竹。の。オ。よ。か。と。も。た。よ。と。ち。り。ぬ。る。よ。ま。

竹取抄















と訓をチアの及文なり  
 巴樂の多れ 顕宗紀私計  
 王室壽辭云 推上賜玉常  
 世壽云 釋云 推上賜者  
 飲酒義也  
 うけらういど 仁徳紀蓋  
 之也 天容之如地の容と  
 ウケイル、いともまされ容  
 不違まともあまべー

高貴 古名伊也

あぢぶなり  
 世界れものごとくはなまわらるる  
 うごころのかくやひを城をてーづれえ  
 てーおちとちおちれらうてーまを  
 あてーハ貴也 源氏のあて人とてま  
 貴くと注せわらうやうなうて  
 氣貴まきし えてーいまよまひかく  
 やひめいいてしてあらんともわ  
 なり 万葉の藤原卿妻系女安見見  
 時れらうた ももらもやあえん  
 みるく (Ginny) はさるる  
 りる

の以 長恨歌 養在深園人  
 未識 たそやそ 輕爾  
 とさちう 欽明紀 不可輕  
 爾而伐之  
 十すきつてわと 万十二  
 のやま川に安寝をぬす  
 くのぞりせとくまも

竹取抄

垣牆 容易 だれもいへし  
 うちとてわてぬもてわらうなかり 萬  
 葉の彼夜者吾毛もぬのひてこも  
 七信口池 ありともぬを おちらぬ  
 物法よあもいぬぬぬぬぬと  
 視其私屏 日本 喚











































和名鈔六和國十市止保保  
六番

百子万里 百里千里万里と次第  
又まねくそ紫く。有るは倍の天竺  
又新をまねく結ふ。十万里程多以難  
なまらふ日一又紫く。八のそら 十  
市郡 ともとのそらりよそらうか  
たう

あまの寺よびんげのまをふはちち乃  
せうらうまをふにさうふをさうてふ  
さのふらうま入く。倍うまの枝よつて  
あまののまよてさてふてふれ  
しつふ 四分律云。賓頭盧本此優  
填王臣由精勤故王放出家得阿羅

竹取抄

花をふかしくか。おと略  
うたふおまふなむた付  
心の中。上古の風は万十  
五十年の夫かほらふ乃  
はおこし。おれおふふ  
どあつたふ

竹取抄

漢賓頭盧翻不動也。感通傳曰。今時  
有作賓頭盧聖僧像之房。供養亦  
一途。然須別施空座。前置鉢鉢至僧  
食時。令大僧為受。不得以僧家盤盂  
設之。以凡聖雖殊。俱不觸僧食器。右  
是俗家則隨俗。所設恐僧不知。附此  
編出。鉢 順和名鈔。學佛道者之  
食器也。胡人謂之盂。混黑 ち  
そららうらうさし。いれうまの作  
おれまむえのけう枝よまを  
ちてとては物なり  
かたさあやしうりてんまはら



の中よりありひろきくふれぞ  
石造佛子  
 やるのころまゝをたたく  
 ふいしのころのたたくがふれぞ  
 血の涙のけくよあふまけを  
 かきしめんころあふれぞ  
 續博物志云佛樓沙國有佛鉢受三  
 升許青玉也或曰青石或曰雜色而  
 黑多四際分明厚可二分貧人以少  
 華投中即滿富人以多華正復百千  
 萬斛終不滿或曰在月支國又水經  
 注西域有佛鉢今猶存其色青紺而  
 光云云 河社云 西域記云波刺

竹取抄

斯國釋迦佛之鉢在此王宮南山住  
 持感應傳曰世尊初成道時四大王  
 奉佛石鉢唯世尊得用餘人不能持  
 如來滅度後安鷲山與白毫光共為  
 利益四大王各ひらの石もちを  
 心をも併寫をきひておいて  
 つとめてもちたり  
 はしげうのえんま  
鉢  
 ちるのえんま  
 ちるのえんま  
 ちるのえんま

大和志云  
 大和志云  
 大和志云

竹取抄























古くまゝにけりては  
 一きくかたにけりては  
 ちのまゝにけりては  
 保せまゝにけりては  
 思ふ時のまゝにけりては  
 ぞとてはぞとては  
 伊おぬ内こつては  
 ちよとてはちよとては

ぐさしとありては  
 ひきつりまらぬ  
 ちつとけちけりては  
 一きくかたにけりては

けしぐれ 支願 ぼづるし 伊文 菱  
 ちよとてはちよとては  
 概

此はまゝにけりては  
 ちよとてはちよとては  
 の枝ぬりけりては  
 ちよとてはちよとては

竹取上世三

哀不忍聴 崇峻 三三三

いかに

いかん 今に  
 ちよとてはちよとては  
 伊おぬ内こつては

永一向 ちよとては  
 浅猿 姉 一向  
 びんちよとては

竹取抄



又かゝるあはれはまたとちとくはわづらふに  
 もあなう 辭  
 おきぬにおねのちきつひなまゝに  
 内子よまうをさういふたはあまのけ  
 本をこゝろいふむあや志九るはり  
 くめきとさそのめしてしるは  
 河社よ草葉本の心乃玉れ枝はうら  
 花は園ゆつれそよた大ねあおほ  
 いまはうらうらをいふはうらうら乃  
 られまこののめをいふはうらうら  
 一さるおねいふはうらうらうら  
 うまうらうらうらうらあそせたまお

とと城つちうくはう玉の枝はこ  
 まりしう文選又珊瑚をたのめ  
 と點せり寶樓閣經云上古生三竹  
 金為莖葉七寶為根於枝梢上皆有  
 真珠云々小牕別記海外有蓬萊閼  
 苑第一山曰廣桑有瓊樹之林又有  
 瑤林云々海内十洲記曰玄洲有金  
 芝玉草云々圓機活法曰玉枝漢武  
 帝得西那國玉樹賜近臣年高者有  
 病則枝汗云々  
 けりてててててててててててての  
 二月の十日うらうらうらうらうらに

後世よりいふより  
 神武紀云到難波之碇會  
 有奈朝太急目以名為浪  
 速國亦曰浪華 万十五  
 竹取抄



























一、  
 二、  
 三、  
 四、  
 五、  
 六、  
 七、  
 八、  
 九、

事なり

竹の子の葉は、  
 何ぞぞや、  
 りもあ、  
 のび、  
 信、  
 ち、  
 文、  
 家、  
 力、  
 か、

此の文も、  
 未詳

授官とて 内匠春頭一  
 人 取一人 大允一人 少允  
 二人 大層一人 少層二人

用ハ、要、

信、  
 ち、  
 文、  
 家、  
 力、  
 か、  
 信、  
 ち、  
 文、  
 家、  
 力、  
 か、



安定

或人云... 語道遺雖過不過猶德

あはれ... 顔色

抄の上三

おれ... 笑譜

万十二... 語道遺雖過不過猶德

昨夜

竹取抄

あはれ... 竹取抄







































河海抄  
無敵

たゞしきりしるるいふまゝにこそぞけ  
なごもれきいあしあしとくひは

無遂 トサキ まれまげとてまゝなり

無端 アハシ あぢまゆしし安信なりと

の素なるなり

大伴のまゆまれ大辨といふまゝにまわ  
りあはくもあつたてしむるまゝ

姓氏録曰大伴道臣命十世孫佐氏

彦之後也 一の社よかや姫を思ひ

おもふふくの中よあまう大付乃

不姫しむおとこ文武天皇の代

の贈右大臣大付常祢御行とて

河海抄上四十二

あつたれ但し他お流たれぞと  
まゝいふまゝなり

きつめのまよひま色のあつたあはま  
あなりそまゝなり

まらねはけん事なりぬんまゝ  
まよまのこまおまのまゝなり

まらぬ九おあせの事いふまゝなり  
但しまゝたかおまゝなり

んねたりのまのまゝなり  
まゝなり

最尊 イホタラシ 仰ぐまゝなり

祢のまゝなり

河海抄











































ておきしつらいかたをうや  
ア越し休むかたれがま  
きつらハヤナ玉はるの  
珠渡りかた

のいひらるゝ大付大納言のきり  
ひのむらりくおきりきりきり  
とあはれあはれきりきりきり  
あはれあはれきりきりきり  
とらひられあはれきりきり  
ふよわきよあはれきりきり  
きりきりきりきりきり

あめきりきり 大巨堪 唐人調諺

有桃花面皮杏子眼孔之事但し是  
ハ杏子ねらぬのきりきりきり  
きりきりきりきり







竹取物語抄